

# 經典研究の観点と方法を考える

伊藤 瑞 叡

本論は、筆者が今日に至る四十有余年、仏教研究に志しを重ねて、追究もし適用もなしてきた研究の観点と方法を自省して、それを整理し秩序化し、再構成し提言して、事例をも提示し、もって再考することを目的とする。——目次——一、問題の所在

(1) 批判仏教学のレベルを前提して仏教古典学として思想研究をなす原典解明の学を推求する(もって組織仏教学↓実践仏教学を目して組織神学 Systematic Theology に対する)。(2) (仏教学本来の研究意識を再生し究明目標を確定するために) 仏教の思考法を確認して諸学の思考法を学習し適用すべきか。(3) よって、仏教古典学の原典解明学としての観点と方法を追究し論明しなければならぬ。二、仏教(古典)学は(伝統宗乗学の習得を要件とする)原典解明の学として自己の責任と經典の意義とを如何に規定するか、また成立論によつて如何に規定されるか、を推求(し提言)する。三、汎論上の(分析判断レベルにある)一般(的)研究(方)法における(部分と全体とに対する類比的と帰納的と演繹的との推理に適合する三種の)観点を推求(し提言)する。四、汎論上の(分析判断レベルにある)一般(的)研究(方)法における(研究法と統整法との)方法を適用することを提言する。五、各論上の(総合判断レベルにある)特殊(的)研究(方)法として概念論の応用を推求(し提言)する。六、特論上の(先天的総合判断レベルにある)新規(的)研究(方)法として(目標観点となる)設問原理を推求(して①思想体系性・②目的合理性・③構造機能性の三種の原理を提言)する。七、仏教古典学としての原典解明学における新規的研究(方)法としての目標観点となる設問原理に対する解答方式となる分析方法を推求(して①定性定量二分法・②言語分析手法・③記述的観照方法・④解釈学的方法・⑤文面構成の形状分析・⑥義理構成の構造分析・⑦意趣構成の機能分析の七種の分析方式を提言)する。八、仏教古典学としての原典解明学における⑧構造機能分析・⑨図解分析手法・⑩計量分析手法の三種の分析方式の随宜適用方法を推求(し提言)する。九、研究の観点・方法・論証等の真偽を検証する手法として形式論理学の虚偽論の適用を提言する(わが批評の師、福田恒存はこれを用いて論敵を破折した)。

一〇、かくして結論として(私的)新研究の可能な観点と方法を要約し(法華經の原典解明学的研究に適用して)、これを発案し、しかも比較哲学的分析を要することを示し、もって要結とする。一一、その若干の(試行)事例を明示して要約的結語とする。

## キーワード

- 1 原典解明学
- 2 伝統宗乗学
- 3 構造機能分析